

やよいじだい かめかんぼ 弥生時代の甕棺墓

本格的な水田耕作の開始、青銅器・鉄器の流入伝播、大陸との交渉の開始、そして弥生土器の使用に代表される弥生文化は、紀元前8世紀～紀元後3世紀前半まで続いたと考えられています。集落も発展し、物質文化・精神文化はもとより吉野ヶ里遺跡に見られる大規模な環濠集落の出現など、地域社会の構造も大きく変化していきました。

町内では弥生時代の遺跡は少なく、平成3（1991）～4（1992）年に『一條森園遺跡』が調査され、弥生時代前期から後期までの墓（甕棺墓・木棺墓・石棺墓・土壇墓）188基、弥生時代前期から後期及び古墳時代後期の竪穴住居216軒が確認されました。とくに弥生時代中期の2列からなるみごとな縦列埋葬墓群は南筑後地域では珍しい例としてあげられます。なお、甕棺からの出土品（石剣1本）では、集落内に目立った階層性（序列）は見られないようです。いずれにしても、長期間営まれたこの遺跡では、広川の弥生人に計画的な埋葬意識があり、北部九州で盛行したさまざまな埋葬方式が存在したことがわかります。



森園遺跡（1次調査） 中央が2列の縦列埋葬墓群で、住居は墓をよけています。